

# 日本人教習の日本語教科書の編纂をめぐって

高橋 良江

〔抄 録〕

1905年から1906年にかけて、当時の中国人留日学生数は8,000人を超えた。その受け入れの中心となった宏文学院が最も力を入れたのは速成師範科であり、1906年までの4年間で学生数は3,000人に達したという。このような状況の中で学院の財政は圧迫され、教職員の質の低下が顕在化し、その結果、学生達から不満の声が学院長嘉納治五郎に続々と寄せられた。この要求に応じて、日本語担当の教授陣は分かりやすい体系的文法の教科書作りを模索した。短期間に日本語を最も効果的に教える文法教科書の必要性であった。そして1906年8月、宏文学院編纂『日本語教科書』全3巻が刊行された。そこでの改良点は日本語の中で最も複雑で学習上困難な助詞、助動詞の用法を明らかにすること、中国人留日学生にとって特に難しい副詞、接頭語、接尾語の用例を多く示すようにしたことなどであった。その編纂の中心になったのが三矢重松、松下大三郎、松本亀次郎で、後に国文法の大家や中国人留日学生教育の第一人者となった人たちである。本稿ではこれらを明らかにすることにある。

キーワード 速成教育 日本語教科書編纂 松本亀次郎 三矢重松 松下大三郎

## はじめに

松本亀次郎(1866~1945)は1903(明治36)年6月、公立学校の職を辞して嘉納治五郎の主宰する宏文学院の教授になった。松本は以前から中国文化を敬愛し、嘉納の主張する教育方針にあこがれていた。嘉納も松本の国語教師としての実績、特に国文法に対する能力及び教授法を高く評価していた。そのきっかけとなったのが『佐賀県方言辞典』の出版であった。これが上田萬年(国文学者・東京大学教授)<sup>(1)</sup>に認められ、柿村重松(佐賀県出身の宏文学院教授)<sup>(2)</sup>によって嘉納に紹介されたのである。この頃の宏文学院には国文学、文法学の専門家が多かったが、文法を中国人留日学生にわかりやすく教授できる人は少なかった。そういう状況の中で、国文学・文法学者三矢重松、松下大三郎などが、直接松本の教科書編纂に力を貸した。<sup>(3)</sup>

筆者は以前から松本が教科書を編纂する際、その根底にあるものを彼の直筆によって知りたいたと思っていた。たまたま遺品の中に『漢訳日本口語文法教科書』を東京市に提出したときの

「書籍継続発行申請書」を見ることができた。<sup>(4)</sup>本稿ではその史料をもとに、彼の日本語教科書編纂の根底にあるもの、それに影響を与えた人々について考察していきたい。

## 1 松本亀次郎の教科書に求めるもの

宏文学院が清朝政府の近代化の要望に応じて中国人留日学生を受け入れたのは、1902 (明治35) 年1月であった。受け入れに当たって嘉納は次のように述べている。

我らの希望するところは、資産あり、学識あり、信用あるもの…また技量あり、信用あれども資産なきもの…いずれにせよ、学識経験を有する者、清国に雇聘せらるるに方りてはただ自己の利益のみ考えず、真に清国の利益を図る考えをもって往かざるべからず。真に善隣の道を尽くしてこそ、始めてその結果反射して我が国の大利益となるべし。

予は、かくのごとき考えを有するがゆえに、今回弘 (のちに宏と改める) 文学院といえる学校を起し、清国より我が国に來りて諸種の学問をなす学生のために便宜を与うこととせり。この学校においては、清国学生に日本語を教授し、また普通教育を施し、各種専門学校に入るの予備をなさしむる計画なり。また別に速成の専門科を置き、短日月間に専門の学術を修めて、帰国するものの便を図らんとす。<sup>(5)</sup>

つまり嘉納は、留学生の受け入れが両国の利益になること、その便宜を与えるために普通教育の他に速成教育の部門をおくことにした。

当時の中国人学生の日本への留学は、1905 (明治38) 年から1906 (明治39) 年にかけて頂点に達し、その数は8,000人を超えたといわれる。<sup>(6)</sup>このような状況の中で、日本の中国人教育の機関はどれも速成教育が中心であった。それに対して樋口秀雄 (衆議院議員、経緯学堂設立にかかわる) は、

日本語学校ニ於テハ速成教授ハ長キモ二ケ年半、短キハ六ケ月ヲ普通トシ、甚シキハ三ケ月以内ニ終了セシムル講習会ノ如キモノアリ。教科ノ種類ニ至テモ、或ハ石鹼製造、或ハ鉛筆製造ノ如キ、或ハ手工、造花、簿記ノ如キ、単ニ技術上ノ徒弟制度ニ過キサルモノアリテ、ソノ修了者ノ如キハ留学生ノ名ヲ値セサルモノ極メテ多シ。速成学生ノ最多数ハ九ケ月又ハ一ケ年ノ速成班ヲ終了セシニ過キサルモノ大多数ヲ占ムル。此等多数ノ速成学生ハ、学術上ニ於テモ造詣甚ダ浅ク、日本ノ国情等ニ至テハ殆ント解セサルモノ比々概ネコレナリ。<sup>(7)</sup>

と批判している。

経緯学堂教員の堀江秀雄もまた『国学院雑誌』で、

今我が国に留学して居る学生を見るのに…いづれも速成を期して居る…少なくとも4～5年間一学校に在学して、秩序を追うて修学したなら、帰国の後その国の為にか裨益を与えることが出来ようけれども…この短日月の間に修め得る所は幾何もあるものでない<sup>(8)</sup>と速成教育を批判している。

宏文学院でも最も力を入れたのは速成師範科であった。速成科の廃止が決定する1906(明治39)年までの4年間、留学生の数は3,500名、教職員数は380人で、その大半は各種の速成科に在籍していた。<sup>(9)</sup>当然、規模の拡大は学院の財政を圧迫し、教職員の質の低下を招いた。その結果、速成教育中心だった教育方針に対する学生からの不満がでてきた。彼らはまず普通科、師範科とも未開講科目と休講時数の多い点を指摘し、教育成果に不安を抱いたのである。留学生代表は有志をつのって改善意見を集約し、これを嘉納学院長に提示した。彼らの主張をまとめると、次のようになる。

速成師範科を代表する周鳳翔は、教職専門科目を整理し、社会科学や自然科学関係科目の導入を要求した。1905年湖南班学生部長楊明肅は、英語及び数学担当教員の力量不足に憤慨し、「不良教員」の排除を訴えた。

普通班学生部長楊有助、陳伝理等の批判は、日本語教育にも及んだ。それによると、日本語及び日本語文法の教授方法が担当教員によって千差万別であり、日本語履修者の間に、日本語理解をめぐって、混乱があること、これを改善するためには「簡潔明瞭」な日本語教授法が焦眉の急であることが指摘され、嘉納に教員の交代を訴えている。<sup>(10)</sup>

このような中国人留日学生の要求は、宏文学院の日本語担当の教授たちに、わかりやすい教授法という課題を投げかけた。これに対して松本は、中国人留日学生を教える中で、次のように考えた。

教授者、被教授者双方とも、彼此の会話に通じないものが文法を教えるのは難儀であったが、短時間に日本語文を最も効果的に教えるにはどうしても文法を教えねばならぬ必要が起ってきた。<sup>(11)</sup>

院長嘉納もこの松本の文法中心の教授法に賛同した。松本は今まで教えてきた教案をもとに、教務長三沢力太郎(数学博士)の助力と学生たちの要望にもとづいて一つの教案を作り、1904(明治37)年7月『言文対照 漢訳日本文典』を編纂した。<sup>(12)</sup>この『言文対照 漢訳日本文典』の特徴は、松本が例言に「本文は上段に日本語、下段にその中国語訳の形式をとって、日漢対照は日本で初めての試みである」<sup>(13)</sup>と記している。表記は、漢字にルビをつけて、かなは総てカタカナにした。松本は「隣邦留学生教育の回顧と将来」のなかで、

この教科書が文語体を主とし口語体を従としているのは、当時は教科書をはじめ、ほとんどが文語体で書かれており、しかも多くが漢字表記であって漢文と近いために、中国人学習者にとって分かりやすいからである。<sup>(14)</sup>

と述べている。その後、この本は、松本が時代にに応じて改良を加え、40版まで刊行され、松本の他の教科書とともに、中国人学生に広く読まれた。その様子を松本はこのように記している。

この当時来朝の支那留学生は誰でも彼でも一冊は買い求め、日本語文を学ぶ津梁としてくれた。長崎へ留学生が百人着いた、二百人着いたと言え、その人数分の冊数は間違いなく売れた。支那内地でも各処で翻刻や謄写版にして教科書に使用せられ…。<sup>(15)</sup>

松本の遺品の中には手帳が多数あるが、そこには中国の各地から教科書を注文して来た学生の氏名住所が詳細に書き記されていた。

## 2 宏文学院編纂の教科書誕生まで

1906 (明治39) 年6月、中国人留日学生の教育改善要求に応じて、宏文学院は嘉納治五郎をはじめ、教務主任三矢重松、松下大三郎、井上翠、柿村重松、門馬常次、白田寿恵吉、小山左文二、唐木歌吉等の教授<sup>(16)</sup>および松本を中心に、日本語教授研究会を発足させた。研究会では「教科書編纂にかかわる綿密な討議が何回も繰り返され、多くの補筆、修正が行われた」<sup>(17)</sup>と、松本は回想している。こうして1906 (明治39) 年8月、宏文学院編『日本語教科書』全3巻が完成した。松本はその「例言」で、

この三巻は、余が宏文学院長の命を受けて編述する所なり。其の間、日語諸教授の賛助に因り、或は自己の研究に由り、編次の体裁を、易なるもの幾度、文字章句の、改組を為すもの、幾多なるを知らず。<sup>(18)</sup>

と述べているように、松本にとって、多くの文法の専門家の中心となって編纂していく労苦は大変なものであったと推察される。

『日本語教科書』の第1巻の内容は「語法用例を学習することが目的のために、自学自習できるように練習問題を問答形式にしたこと、日本語の中で最も複雑であり、学習する上で困難な助詞、助動詞の用法を明らかにするよう配慮したこと、さらに難しい副詞、接頭語、接尾語の用例を多く示すようにしたこと<sup>(19)</sup>」などが書かれている。

第2巻は1906年6月に編纂されている。全体は42課の構成で、1課「現在・進行法」、2課「過去・進行法」、3課「未来・進行法」というように、文型を項目の軸として配列している。

第3巻は1906年8月に編纂された。「序は嘉納から松本になり、特に困難な接頭語、接尾語、副詞の学習項目を各課に配した<sup>(20)</sup>」という。

ここで少し教科書の内容にふれてみる。日本語教科書の中に音声教育を重視していることがわかる個所がある。

第1巻第1課「片假名五十音」に始まり、第23課「数字」まで、発音、仮名表記、数字の学習になっている。特にナ行とラ行 (第5課)、マ行とバ行 (第10課)、これは中国人留日学生にとって発音しにくい音声である。松本はある時学生から、「假名」の発音で一番難しいのは何ですかという問いに対して、こう答えている。

「なにぬねの」と「らりるれろ」の区別です。大概の人は、「らりるれろ」は出来ますが、「なにぬねの」は出来ません。大概「らりるれろ」と混同します<sup>(21)</sup>。

これは松本が教室での経験で得たものである。また、松本にとって例文作成は重要な課題である。学生の身近なもの、留学生活に必要な事柄を選んでいる。例えば、「問 外国ノ留学生ガ、高等学校や大学に入ラウトスル時ハ、ドンナ規定ニ抛ルノデスカ」「答 ソレハ、明治三十四

年十月ノ文部省令第十五号ニ特別ナ規定ガ設ケテアリマスカラ、ソレニ拠ッテ簡便ニ入学スルコトノ出来ル様ニ、ナッテ居リマス」<sup>(22)</sup>というようにである。例文作成はこのように中国人留日学生にとって知りたいことを意識して書かれたものである。

### 3 松本亀次郎の教科書編纂の根底にあるもの

1919 (大正8)年10月『漢訳 日本口語文法教科書』が出版された。松本にとって3冊目の教科書である。この教科書を出版する際に東京市に申請した文書が残されている。「書籍継続発行申請書 (其二)」である。松本はその内容の特色について、

本書ハ、満支学生ニ適切ナル我ガ口語文法ヲ授クルヲ以テ目的ト為スガ故ニ、日本学生ナラバ、教ヘテ俟タズシテ、自ラ明ラカナル語法モ、彼等ニ対シテハ、却テ綿密ニ規則立テテ教フ可キ者少カラズ。殊ニ助詞・助動詞・副詞・敬語・補助動詞・接尾語等ニ関シテハ、詳説ヲ要スル者頗ル多シ。本書ハ著者多年、実地授業上ニ用イタル教案ヲ整理修訂シテ編著セル者ナリ。<sup>(23)</sup> (句読点は筆者による)

と述べている。この当時、日本の予備学校の教授および中国の日本人教習の大半は、使用教科書、教授法ともに日本人学生に使用しているものと同じであった。それに対して松本は、「申請書」の備考で次のように記している。

満支留学生ノ文法ヲ重ズルハ、日本学生ノ比ニ非ズ。彼等ハ既ニ相当ノ年令ニ達シ且ツ中等学校以上ノ素養有ル者ナレバ、日本語ヲ教フルニモ暗記時代ハ通りスギ成ル可シ。教材ヲ理論的ニ組ミ立テ、一ヲ推シテ十ヲ悟ラシムノ法ニ拠ラザルベカラス。サレド理論ト応用トハ常ニ並行ス可キ者ナレバ、筆者ハ本書ノ姉妹編トシテ日語肯綮大全、日本語会話教典及ビ国定教科書、中学国語読本等ノ抄本ヲ併用セリ。<sup>(24)</sup> (句読点は筆者による)

中国人留日学生にわかりやすく文法を教える目的で作られた松本の教科書には、どれも工夫がなされている。さらに下段に漢訳がついているから、学びやすいのは当然であろう。そのうえ日本人学生が使用している国定教科書や中学国語読本等を併用することによって、中国人留日学生が目的とした高等学校、専門学校、大学等への入学に向けての学習に考慮したものである。

これは、松本が生涯中国人留日学生の教育にかかわってきたがゆえに、文法上の困難点や誤用などに配慮した教科書が中国人留日学生の学習に大きな効果があったこと、また会話を問答形式にすることによって自学自習を可能にしたのである。最後の教え子として松本と個人的な交流の一番長かった汪向荣 (中国社会科学院教授) は、『お雇い日本人教習』の中でこのように述べている。

一国の言語を学習する場合、その言語が理解できればよいと言うだけでなく、その国の状況と自国との相互関係が了解できなければならない。しかしこのような書籍はたいがい専門書で、日本語学習用の著作では、松本氏のもののほかにはないであろう。<sup>(25)</sup>

松本はどの教科書に関しても必ず改訂版を出している。『言文対照 漢訳日本文典』40版、

『漢訳 日本語会話教科書』17版、『漢訳 日本口語文法教科書』24版、『訳解 日語肯綮大全』13版である。その目的は時代が変化すれば、日本語も時代に応じて変化する。その改定の内容こそが中国人留日学生にとって大切なものであった。特に会話においては、日常性を反映するものであるだけにその必要性は大きい。そのことを汪は、具体的にこう述べている。

たとえば、『日本語会話教科書』は1914（大正3）年5月初版が発行された当時は、日本語の中は諺や俗語はあまり使用されなかった。しかし、時代の変化にともない、諺や俗語が文章にも多く登場するようになった。中国人が日本語を学ぶとき、これらへの注意も必要になった。そこで1930（昭和5）年、この本を再販したとき、諺や俗語の解釈を増やした。こうした絶え間ない改訂と虚心に学問を追求する態度も、やはりひとつの重要な原因である。<sup>(26)</sup>

また、松本の教科書『松本亀次郎選集』全7巻の復刻版<sup>(27)</sup>を2011年6月に出版した吉岡英幸（早稲田大学大学院教授）は、次のように述べている。

『漢訳日本語会話教科書』の初版本には付録「言文対照漢訳書簡文語用例」が欠けていたため、付録の部分だけ1936年2月発行の15版のものを初版の奥付の後に付けた…付録は「候」の用語を軸にした手紙文の書き方の解説及び用例で、手紙文の構造や返信文の構造などもとりあげている。<sup>(28)</sup>

このように初版本での不足部分を必要に応じて改訂版でとり入れるという松本の姿勢は、他の学者たちが出版する日本語の教科書よりも、中国人留日学生にとっては身近な1冊だったことが上記の汪の指摘からもうかがえる。

宏文学院において松本が最初に出版した『言文対照 漢訳日本文典』、宏文学院編の『日本語教科書』3巻の成果が、松本を北京の京師法政学堂の教習へと導いたのである。京師法政学堂への招聘について、松本は次のように述べている。

京師法政学堂に招聘されたのは、1908（明治41）年4月である。然るに通訳を用いずして成るべく日本語で、直接に日本人教習の講義を聴き得るようにしたいというので、ぼくより先に小林・井上両氏が其の教授に当たって居られたが、クラスがふえたので宏文学院で知り合いの井上氏が推薦してくれた。支那側の先生達も直接間接に僕を知っておって呉れたので、日支両方面の教習諸氏の同意があつて同学堂へ聘せられる事となった。<sup>(29)</sup>

松本は、井上翠によくこんなことを語っていた。

学生の質問に正しく答えることによって、自分の学力を向上させることができるし、教授法の欠陥も発見できる。<sup>(30)</sup>

松本は授業の後、学生からの質問をととても大切にされた。それは中国人留日学生の質問によって、自分の授業での説明不足、理解の不十分さを発見できるからである。これは松本だけでなく、松下大三郎、三矢重松にしても同じであった。宏文学院における中国人留日学生との日々の教授体験が、日本語文法を分かりやすくする工夫に結びついたのである。

## 4 松本亀次郎に影響を与えた人々

### (1) 松下大三郎と三矢重松

松本は『漢訳日本文典』『日本語教科書』編纂において、「松下大三郎、三矢重松から文法について多大な影響を受けた」<sup>(31)</sup>と述べている。松下と三矢は国学院（現国学院大学）の卒業である。その松下大三郎（1878～1935）とはどんな経歴の人物であったのだろうか。

1878（明治11）年9月24日、静岡県磐田郡豊岡村下野部に生まれた。1893（明治26）年7月、文法研究を深めるために上京、その年の10月、東京専門学校（現早稲田大学）英文学科に入学したが、文法の授業に満足できず退学、1895（明治28）年9月、落合直文（国文学者・歌人）を頼って国学院に入学する。1899（明治32）年4月、日本最初の口語文典『日本俗語文典』を「国文学界」に発表する。1905（明治38）年4月、三矢重松（国文学者・文学博士）の推薦で宏文学院の教授に招かれる。以後10年間、中国人留日学生に日本語を教えた。1907（明治40）年7月、中国人留日学生のための日本語教科書『漢訳日本口語文典』を刊行した。1913（大正2）年8月、日華学院を創設し<sup>(32)</sup>、宏文学院閉院後の中国人留日学生教育に携わった。

上記の略歴をみても、松下は学問において松本をはるかにしのぐ大家である。徳田政信（中京大学教授、文学博士）によれば、「松下大三郎は10年間中国人留日学生の日本語教育に従事して、その体験の中から日本語を母国語としてではなく、中国語と対比して客観的に外国語として考えるということが、彼の理論文法になった」<sup>(33)</sup>と述べている。

松本の最初の文法教科書『漢訳日本文典』では、松下の助言、指導が相当あったと思われる。松下も日本語教育の現場で、文法の本質や具体例等の問題に関しては、中国人留日学生の質問にいかにかわりやすく説明するかを工夫した。日本人に教える「国文法」ではなく、日本語を母語としない学生に対する発想で、説明をわかりやすく記述している。例えば日本人学生でも分かりにくい補助動詞を松下は、このように説明している。

動詞ヲ分ケテニツトシマス。自立動詞、補助動詞。此ノニツデス。

自立動詞ハ自分デ立ツテ一ツノ動作ヲ表ハス者デス。今次ニ例ヲ挙ゲテ自立動詞、補助動詞ノ区別ヲ説キマス。

(例) 公園ヲ見ル。

見ルハ自立動詞デス。自分デ其ノ人ノ動作ヲ表ハシマス。他ノ用詞ヲ補助シマセン。

(例) 公園へ行ッテ見ル。

見ルハ補助動詞デス。見ルトイフ動作ヲ表ハシナガラ、行ッテノ意味ヲ補助シテ、試ニスル動作デアルトイフ事ヲ表ハシマス。<sup>(34)</sup> 漢文デハ可、得、能、足、欲ナドノ様ナノガ、補助動詞デス。<sup>(35)</sup>

ここにいう補助動詞は、のちに「形式動詞」として、文型や文法的意味を決める重要な語となっている。

三矢重松 (1871～1924) も優れた国文学者・文法学者として、松本に影響を与えた。三矢は1871 (明治4) 年11月29日、現在の山形県鶴岡市に父維顕、母町子の二男として生まれる。1889 (明治22) 年9月、国学院に入学。この前後に生家が没落、苦学生となる。1893 (明治26) 年7月、国学院を卒業後、文部省大臣官房図書課に勤める。1898 (明治31) 年4月、大阪府立第五尋常中学校 (現大阪府立天王寺高等学校) 教諭となり、ここで折口信夫 (国文学者・歌人) と出会う。1899 (明治32) 年9月、嘉納治五郎の招聘で亦楽書院<sup>(36)</sup>の講師となる。1902 (明治35) 年1月、宏文学院創設と同時に教授となる。1903 (明治36) 年10月、国学院の商議員となり、国学院雑誌・中学国文講本等の編集発行により、学者として世に認められる。1921 (大正10) 年『源氏物語』全講会<sup>(37)</sup>を国学院内に設置する。同年4月、国学院大学教授となる。1924 (大正13) 年7月9日、「古事記における特殊なる訓法の研究」で文学博士となる。その年7月18日53歳で逝去した。三矢の文法書としては1908 (明治41) 年12月『高等日本文法』が文法研究書としてよく知られている。もちろん三矢文法は彼が中国人留日学生に日本語を教えた実践から生まれたものである。例えば「対話体」と「記録体」について、次のように説明している。

自己 (話し手) の言説を聴く者、直接に眼前に在るか、然からざるも一定し居る時は、その聴き手に対して自然に一種の語気をなす、これを「対話文」という。人の言説は必ず聴者のあることを期すれども、それを定めずして、ある事物につき思想を言い表わせるものは、これに相当する語気あり、それを「記録文」という。<sup>(38)</sup>

これは中国人留日学生に「語気」の使い分けを教えた経験から来たものである。また三矢について、横山健堂 (講道館・宏文学院講師) は、『嘉納治五郎伝』の中で次のように述べている。

亦楽書院の主任三矢重松博士は篤実綿密な人物で学問は国語学を専攻し、文法研究に一生をささげたというべき、日語教授としてきわめて適材であった。<sup>(39)</sup>

## (2) 井上翠との関係

中国における近代教育制度が始まった20世紀初め、日本人教習が日中文化交流の架け橋として、中国に渡った。彼らは直接中国人に近代的学問を授ける役割を担っていた。北京の京師法政学堂でも、松本亀次郎や井上翠が日本語を教えている。宏文学院、京師法政学堂で松本が一番信頼し、その行動力に敬意を表していたのが井上翠であった。

井上は1875 (明治8) 年3月10日、姫路藩の書家井上松香の次男として生まれた。1899 (明治32) 年、24歳で上京、東京赤坂区中之町小学校に勤務しながら、中等教員免許状 (国語漢文科・習字科) を取得、夜学で英語も学んだ。これらの学歴は松本とほとんど同じ履歴である。その後一旦帰郷したが、再び上京、1903 (明治36) 年28歳、東京府立第一中学校 (現日比谷高等学校) に勤務。同校は全国の模範中学校といわれ、「日支親善」の目的で中国の要人たちが多く視察にやって来た。その時の様子を井上は「教育視察に来ました清国の人士は必ず第一中



学校を参観に来ました。呉汝倫氏なども来校して校長勝浦軼雄と、教育上の意見を交換したこともありました。こうした状態を見るにつけて、自分は一つ支那語をやってみようという気になりました<sup>(40)</sup>と述べている。何度か、意見交換の機会に恵まれる中で、井上の「支那語」への関心が深まっていった。もともと井上の場合、「叔母の娘2人が長崎通事と結婚していたので、その人々が家に来る度に支那のことを話題に乗せます<sup>(41)</sup>」と述べているように、中国および中国語への関心は日常生活の中であったと思われる。それがたまたま呉汝倫が来日し、日中親善の機運が高まる中、自然に支那語の勉強をしたいと思う気持ちが強くなっていった。

1902 (明治35) 年9月から2年間、外国語学校清語科別科に学んだ。井上はその時のことを次のように記している。

わたしは学校では得るところあまり多くはありませんでしたが、松雲程先生 (外国語学校の教授)<sup>(42)</sup>のお宅にしょっちゅう出入りしては教えを受けました。そのうちに支那語をやるためには清国に渡らねばならないと考えるようになりました<sup>(43)</sup>

1906 (明治39) 年32歳の時、嘉納の招きにより宏文学院の教授となり、その年の10月に『日華語学辞林』を編纂している。この当時、宏文学院の日本語の学者、文法の専門家のなかにおいて1903 (明治36) 年に宏文学院に来た松本とは、お互いに心を許しあえる親友として信頼しあう関係にあった。それは宏文学院に至るまでの学歴が似ていたからである。

1907 (明治40) 年、井上33歳の秋、清国政府の招聘で中国の京師法政学堂の教授になった。招聘に至るまでのいきさつについて井上は、「私の北京入りは実にあぶない芸当で今まさに絶えんとする一縷の細い糸によって操られていたのであります。巖谷博士 (京師法政学堂の総教習・法学博士) の手を待っていたら私ごとき学歴のないものは百年河清を待つのも同じ結果であったわけです<sup>(44)</sup>」と記している。当時の中国の学堂で日本人教習を採用する場合、その学堂の長に人選が任されていたが、「この時に限り清朝の学部 (文部科学省にあたる) から駐日公使館に委嘱されたことと、留学生間に信望があったことが買われて、私が登場したわけです。」<sup>(45)</sup>と、井上は自分の幸運を語っている。

1908 (明治41) 年、京師法政学堂で日本語教習を増員する話があった時、井上は松本を強く推薦した。松本は『言文対照漢訳日本文典』『日本語教科書』3巻によって中国でも広く知られていたのが幸いし、スムーズに採用された。松本と井上は京師法政学堂で4年余、中国人学生のために日本語教育に全力を注いだ。

1914 (大正3) 年9月、井上は幾多の学校を経た後、1922 (大正11) 年、大阪外国語学校 (現大阪外国語大学) の教授となった。そして念願の『支那語辞典』『日華新辞典』等を出版し、1957 (昭和32) 年6月、82歳で逝去した。「支那語」の辞典作りにささげた一生であった。その井上に対して、松本は著書『訳解 日語肯綮大全』の「緒言」で、次のように述べている。

井上君は、現在支那語の権威者として、世に定評有るの人、近著『日華新辞典』及び『支那語辞典』の二書は、同君が二十六年間の心血をそそいで、始めて脱稿した者であるが、

同君のこの著は東京宏文学院及び北京京師法政学堂に於いて中華学生に対し、日本語を教授し、帰朝して、山口高等商業学校及び大阪外国語学校等において我が邦の学生に対し、支那語を教授せられ、其の体験上から得た活材料を以て、二書の骨子とされて居る。<sup>(46)</sup> 日本語教育に尽力した多くの日本人教習の中で、井上は辞書編纂、松本は日本語の教科書編纂と東亜高等予備学校の創設という事業によって、日中文化交流に力を尽くした。

汪向栄はこの井上と松本について『回想の松本先生』の中で次のように述べている。

二十世紀初頭から1930年代まで、先生のように隣国留学生の教育の為に努力してこられた方として、はっきりしているのは先生と井上翠さんの二人だけである。<sup>(47)</sup>

この中国人汪向栄の指摘は、松本、井上にとって京師法政学堂における成果ではないだろうか。

## おわりに

松本はもともと国文法に対する能力と学生に対しての教授の熟練者として、嘉納に高く評価されて、宏文学院に招かれた。そこで生まれて初めて、中国人留日学生と出会った。松本は「日中両国は友好共存しなければ」という信念で、日本語教育を中国人留日学生に授けたのである。そのための教科書編纂であった。松本の教科書には中国人留日学生が日本語を学びやすくする工夫が随所にされている。松本は多くの国文学者、文法の専門家の中にあって、地位や名声より中国人留日学生を教えることに生きがいを感じていた。その証拠に1925（大正14）年3月、東亜高等予備学校が日華学会と合併<sup>(48)</sup>の後、松本は校長から教頭に格下げされたが、中国人留日学生を教えるために教育の現場に立つことを望んだ。

関正昭（東海大学教授）は「明治の中頃は、まだ日本言語学も日本語の文法も確立されておらず、中国人に対する日本語教育の中から日本文法学が育った」<sup>(49)</sup>と述べている。当時松本・三矢・松下等の教授した中国人留日学生は、日本人学生よりも進んだ日本語教育や日本語文法（口語文法）を学んでいたと言える。

### 〔注〕

- (1) 上田萬年、東京大学教授、国文学者、『佐賀県方言辞典』に関する助言を佐賀県師範学校の江尻校長に寄せる。
- (2) 柿村重松、佐賀県出身、上田萬年から『佐賀県方言辞典』の出版で松本の存在を知り、嘉納治五郎の依頼で松本を宏文学院へ招聘した。宏文学院教授、漢文学者、『和漢朗詠集考證』著者。
- (3) 拙稿「中国人留日学生の日本語教育を通して松本亀次郎が果たした役割について」（『佛教大学大学院紀要』第40号 2012年）57頁。
- (4) 松本家の遺品「『漢訳日本口語文法教科書』の書籍継続発行申請書」1941年。
- (5) 嘉納治五郎「清国」『国土』第5巻 第44号（造士会 1902年）293～294頁。

- (6) 二見剛史・佐藤尚子「中国人日本留学史関係統計」(『国立教育研究所紀要』第94集『アジアにおける教育交流』) 99～118頁を参照。
- (7) 樋口秀雄「北清ニ於ケル諸外国ノ教育上効果ニ関スル調査」『中国近現代教育文献資料』第2巻 18号 復刻版(日本図書センター 2005年) 2～3頁。
- (8) 堀江秀雄「支那人教育問題」『国学院雑誌』第11巻 第8号(第一書房 1905年) 27頁。
- (9) 酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触—相互誤解の日中教育文化交流—(ひつじ書房 2010年) 97～105頁を参照。
- (10) 「留学生より嘉納宛書簡」(講道館所蔵:宏文学院関係史料)及び蔭山雅博「宏文学院における中国人留学生教育の展開」(齊藤秋男・井上正興・本田公榮編『教育の中の民俗 日本と中国』に所収)(明石書店 1988年) 141～142頁。
- (11) 松本亀次郎「隣邦留学生教育の回顧と将来」『教育』4月号(岩波書店 1939年) 540頁。
- (12) 同前, 540頁。
- (13) 松本亀次郎『言文対照 漢訳日本文典』(中外図書局 1904年)
- (14) 注(11)に同じ。541頁。
- (15) 同前, 541頁。
- (16) 同前, 541頁。
- (17) 同前, 541頁。
- (18) 宏文学院編『日本語教科書』第1巻(金港堂書籍 1906年) 4～5頁。
- (19) 同前, 1頁。
- (20) 宏文学院編『日本語教科書』第2、3巻(金港堂書籍 1906年)
- (21) 日文研究社編『日文研究』第2号(東京日文研究社 1935年) 15～16頁。
- (22) 宏文学院編『日本語教科書』第4巻(金港堂書籍 1906年) 101頁。
- (23) 松本家遺品。注(4)に同じ。
- (24) 同前。
- (25) 汪向栄『清国お雇い日本人』(朝日新聞社 1991年) 245頁。
- (26) 同前, 244頁。
- (27) 『松本亀次郎選集』全7巻(2011年)は吉岡英幸の監修による。
- (28) 『松本亀次郎選集』第1巻『言文対照漢訳日本文典』復刻版(冬至書房 2011年) 11頁。
- (29) 注(11)に同じ。542頁。
- (30) 武田勝彦『松本亀次郎の生涯—周恩来・魯迅の恩師—』(早稲田大学出版部 1995年) 160頁。
- (31) 平野日出雄『日中教育のかけ橋 松本亀次郎伝』(静岡教育出版社 1982年) 199頁。
- (32) 松下大三郎は1907年7月、宏文学院が閉院後、有志学生の要求に応じて、神田区裏猿楽町の数理学院の教室を借り、1913年8月に日華学院を創設、10年間教育に当った。
- (33) 徳田政信・塩澤重義『松下博士の業績をたたえる』(豊岡村役場 1972年) 復刊。
- (34) 松下大三郎『漢訳日本口語文典』(誠之堂書房 1907年) 328～331頁。

- (35) 同前, 3頁。
- (36) 始めは嘉納治五郎の私塾であったが、留学生の増加にともない、のちに教務主任になった三矢重松が塾を「亦楽書院」と名付けた。
- (37) 「源氏物語」の講和は第1年には、紅葉賀より滯標まで八巻を講じ、第2年には蓬生より初音までの9巻を了えて、後5年で全部を講了する予定であった。参考文献 島野幸次(国学院大学教授)「三矢重松伝」(文芸社 1924年) 14頁。
- (38) 三矢重松『高等日本文法』(明治書院 1908年) 541頁。
- (39) 横山健堂『嘉納治五郎大系』第11巻『嘉納治五郎伝』(本の友社 1988年) 171頁。
- (40) 井上翠『松濤自述』。原典は井上が口述したものを筆記し、卒業生たちが、紙を準備し、印刷も大阪外大の印刷所で刷ったという(1950年)。復刻版は〈中国語教本類集成〉第10集全3巻、編者六角恒廣(不二出版 1998年) 205頁。なお井上翠については山根幸夫『近代中国の日本人—井上翠と中国辞典—』(研文出版 1994年) 参照。
- (41) 同前。
- (42) 松雲程先生は清国から招かれたが日本語が全然できず、かつ頑固な人であるが、井上を始め、学生には親切で自宅で勉強会をしたが、月謝などは取らなかった。
- (43) 井上翠前掲書、206頁。
- (44) (45) 同前, 209頁。
- (46) 松本亀次郎『訳解 日本肯綮大全』(有隣書屋 1934年) 13頁。
- (47) 注(31)に同じ。汪向荣の別章『回想の松本先生』中国文手記(静岡中国語講座グループ訳 1982年2月) 284頁。
- (48) 1918年日華学会設立。1925年3月、東亜高等予備学校と合併。校長は日華学会会長細川護立侯爵。松本亀次郎は教頭に格下げされたが、1931年8月まで教育の現場に立ち続け、その後は名誉教頭となった。
- (49) 関正昭『日本語教育史研究序説』(スリーエーネットワーク 2004年)。

〔付記〕

本文の引用文献の漢字は原則として現在使用の漢字に改め、句読点は必要に応じて付加した。なお本稿で使用した松本家の遺品は掛川市立大東図書館「松本亀次郎文庫」によるものである。

(たかはし よしえ 文学研究科東洋史学専攻修士課程修了)

(指導教員：清水 稔 教授)

2013年9月30日受理